
ユキスズ ~ Snowbell ~

からばね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ユキスズ ～Snowbell～

【Nコード】

N0811BA

【作者名】

からばれ

【あらすじ】

キツサキシティジム リーダースズナ

そんな彼女の 昔話

(2008年3月に書いた作品です)

ユキスズ　　＼Snowbell＼

私は高校生のころ、キツサキジムリーダーのスズナと同じ学校に通っていたんだ。

私とスズナはとても仲がよかった。

二人でよく遊んだり、一緒にポケモンバトルしたり、とにかく仲がよかったんだ。

だからスズナが「アタシね、ジムリーダーになる事が決まったよ！」って笑顔で言ってくれたとき、私は嬉しかった。

だってスズナずっと前からの夢が叶ったから。

でも、親友と離れるのはやっぱり辛かった……。

そして卒業の日……。

卒業式が終わった後でね、私はスズナを呼んで秘密の場所に連れて行ったの。

渡したいものがあつたからね。

「ねえユキ？どこ行くの？」

「私だけが知ってる秘密の場所だよ。今日はスズナにプレゼントがあるから……」

「へえ……。ていうかこんな道あつたっけ？すごい道じゃん……。しかも雪降ってきたし」

「3月なのにな」

私達の町は寒い地方にあるから、春の卒業式なのにいつも雪が降っている。

だから私が知っているとところは、他の町には絶対にはず。

「ついたよスズナ。」

「……………なにこれ。」

こんな桜の木は、絶対に見れないよ。

桜の木が、そのまま氷漬けになってるような木は…………。

「どうよこれは？私が最初に見つけたんだよ」

「すごいじゃんユキ！　ね！　近づいてみよ！」

「わわわ！　そんなにはしゃがないでよスズナ！」

そして私達は木の下で並んで腰掛けた。

「これって桜の木？」

「みたいね。咲いたまま凍ってるでしょ」

その木は凍っていたが、その氷の中で桜の花が咲いていた。
光に反射して輝く氷の青と、桜の花のピンクのコントラストが美しくかった。

地面は真っ白な雪で覆われていて、まさに一面の銀世界だった。

「それでユキ？プレゼントって何よ？」

「この風景がひとつ。そしてあと一つは…………」

そして私は通学カバンから小さな包みを取り出した。

「はいこれ。私が選んだんだ」

「えー、開けていい？」

目をキラキラさせながら包みを開けるスズナ。

新しい物へ興味を示しているスズナはとても可愛く見える。

「これ……………、髪留め？」

取り出されたのは、髪を留めるための水色のゴム。

「ほら、スズナさ、『ジムリーダーになるときにイメチェンくらいしなきゃ』なんて言ってたじゃん。スズナの長い髪は束ねるだけでかなりイメチェンになると思うし」

私はスズナのロングヘアを撫でながら言った。

「それはね、今私が付けてるのとお揃いだよ。だからね……………」
そう言つてスズナが持っている髪留めの一つを私は手にとった。
そして今私が付けている髪留めの一つと入れ替えた。

「こうすればいい思い出になるかな、なんてね」

「ユキ……………、ありがとう」

スズナの表情には笑顔が溢れていた。

「ねえ……………、スズナ……………」

「何？ どしたの？」

私はずっとスズナに言いたい事があった。

それを言うために今日は連れてきたから、言わなきゃ意味がない。

「私ね、ホントはスズナとずっと一緒にいたかったんだ。スズナといると悲しい事とかなかったし。だから、スズナがジムリーダーになるのが決まったとき、私も嬉しかったけど、寂しいのほうが大きかったんだよ」

スズナは何も言わない。私は構わず続ける。

「でも、スズナには自分の夢を叶えて欲しい。そのためには、サヨナラくらいしょうがないんだよね……………」

こんなこと、考えたくない。

昔からの親友とサヨナラすることなんて……。
考えるだけで涙が出てきちゃう。

「スズナ、今までありがとう。私すっごい楽しかった。私スズナのこと、忘れないから……」

「ユキ……」

「だからさ、スズナもっ……、私のこと……、絶対に、忘れないでね！」

そこまでいうと、私はスズナに抱き着いた。
もう、涙を堪え切れない。

そして一番の親友の胸で、思いっきり泣いた。

「バカね……。ユキのこと、忘れるはずないじゃないの……」

「うあ、ああ……う、うう……、スズ……っ、うあ……

…ああああ！」

親友の温もりは、本当に温かった。

私の涙を全て受け止めてくれるような人は、スズナしかいないだろうなと、心の底から思えた。

「ユキ……。起きてよ。帰ろうよ。」

「ん……、スズ……ナ？」

「ユキ泣き疲れて寝ちゃったんだよ。全く、可愛いんだから……」
そういえば大分日が傾いている。

「ねえユキ、この場所はアタシ達だけしか知らないんだよね？ だか

らタイムカプセルみたいに何か埋めない？」

「いいね！　じゃあ私はこれ！」

私はツインテールだった髪の毛の片方を留めていたゴムを外した。それと同時に私の髪はロングヘアーになった。冬の白い風に、私の黒い髪が舞った。

「アタシはこれにしよ！」

スズナがそう言って取り出したのはヘアピン。いつもスズナが髪に付けていた物だった。

「じゃあこれとこれを繋げて、この木の根元に埋めとこ。そして5年後のこの日に、ここに来てこれを二人で取り出すの。約束だからね、ユキ！」

「分かった。それじゃ一緒に埋めよっか！」

そして私達は木の根元を掘り始めた。

「ついでにこれも埋めとこうね。」

途中でスズナが不意に取り出したのは、私とスズナの写真。

二人で笑って写っていた写真に、スズナはヘアピンとゴムをつけた。

「じゃあ……、帰ろうか。」

「うん……」

「アタシ、今夜キツサキに行くから……」

「知ってるよ……」

埋め終わった私達は、手を繋いで来た道に戻っていた。

私の右手には、温かいスズナの手の温もりがあって、ぎゅっと握ったら、ぎゅっと握り返してくれた。

何も言わずに歩いたのは、何も言わなくてよかったから。

それは私だけでなく、スズナも同じだと思うんだ。

それに、何も言わなかったんじゃないくて、何も言えなかった。

だって、私もスズナも泣いていたから。

あと少ししか、一緒にいれないと考えると、どうしても涙がでてくる。

こうやって手を繋いで、二人だけの秘密を持った親友との別れが目の前に来ていると考えると、どうしても涙がでてくる。

もっと、一緒にいたい。

それだけが、私達の願い。

でも、分かれ道についたら、一緒の時間もおしまい。

繋いだ手が、そっと離れた。

友の温もりが失くなった手に、夕暮れ時の冷たさが染み込んでいった。

「ユキ……、ありがとう」

「がんばってね、スズナ」

それだけを言っ、私達は背を向けあつて歩いていった。

5年後にまた会うまでは、夢に向かってひたすらに歩いていく。そう、約束した。

でも、涙が冷たかった。

アタシは今、結構強い。

キッサキジムリーダーになって5年間、ほとんど負けていない。

「ダイヤモンドダストガール」とかいふ別名までついている。

氷タイプのジムリーダーはもっとクールに振る舞わないといけないかも知れないけど、「スズナは明るくなきゃ」という親友の言葉が嬉しかったから……。

それで今日は、その親友と再会する日だ。

凍った桜の木の根元に埋めた宝物を、二人で掘り出す日。

早く行かなくちゃ、ユキがきつと、そこにいるから。

来てないんじゃないかなという不安に刈られたりもしたけど、アタシは木の根本まで走っていった。

……ユキは、そこにいた。

5年の歳月が経ったけれど、見たらすぐに分かった。「ああユキだなあ」って。

どうやらアタシに気付いたみたいだ。ユキはこっちを向いて何かを叫んでいる。

アタシも早く、ユキの元へ……

「来ちゃだめえええ！」

その言葉と共に、目の前が白く染まった。

でもその白はすぐに消え、代わりにユキの姿があった。お互いにそんなに離れてないのに、遠い所にいるみたい。

……ユキが近づいて来た。その顔は涙でくしゃくしゃになっていた。

「私のつ、私のせいで、雪見桜の神が怒ったから……、私の大切な人、みんな、死んだ……」

「ちよつとユキどうしたのよ！雪見桜の神って何よ！」

「……………あれ」

ユキが指差す先にいたのは、青い翼と長い尾を持った鳥。

氷ポケモン好きにとって、一度お目にかかりたいポケモンだった。

「フリーザー……」

「私が住み処を荒らしたから……、5年前、土に何かを埋めちゃったから……」

「それって……」

アタシの記憶にあるのは、二人で埋めた写真とヘアピン、ゴム。

それがフリーザーを怒らせた？意味が分からない。

「次はスズナが狙われる！ だから……、だから逃げて！ 私がフリーザーに殺されたら全てが終わるから！」

「な、何言ってるのよ！ アンタを見殺しになんか出来るわけ……」

「私の大切な人に、これ以上死んで欲しくないから……」

「なら……、ならアタシが！ フリーザーを倒すから！ だから大丈夫！」

それしか、方法が無かった。

アタシはフリーザーの方を向き直る。

吹雪が、冷たかった。

「アタシはキッサジムリーダーのスズナ！アタシの親友に何かするなら許さない！」

そしてアタシは腰のボールに手をかけた。
ジム戦では使わない、5匹目に。

「マンムー！ストーンエッ……」

白が、訪れた。

全てが白い。アタシは負けたみたいだ。

……ユキは？ユキは無事なの？

隣で誰かが倒れている。長い髪を白雪の上に広げて……。

だんだん視界が広がって来た。

倒れているのは……、ユキ。

「ユキ！」

返事が無い。アタシは凍傷になりかけの体を無理矢理動かしてユキに近寄ろうとした。

耳鳴りがする。ミシミシ音がする。

アタシはふと音の方を見た。

広がるのは、絶望的な光景。

雪見桜が、倒れてきた。

倒したのは、多分フリーザー。

逃げなくちゃ！でも、体が動かない。

すぐそこに死が迫っているのに。なのに、何も出来ないだなんて……

……！

黒が、訪れた。

全てが黒い。

アタシは死んだみたいだ。

でもその後、白が訪れた。

吹雪が止み、白い空がそこにあった。

視界の左に、倒れた雪見桜。

白と青とピンクと赤が、美しかった。

血のような赤だった。

……血？

「ユキ……？」

隣で倒れていたはずのユキの姿が無い。

代わりにあるのは、倒れた木の下から除く、ユキの髪。

綺麗な黒だったはずのユキの髪は、赤と黒が混じった色になっていた。

だんだん頭がはっきりしてきた。少しずつ分かってきた。

ユキが……、死んだんだなって。

でも、信じられなかった。あまりに突然すぎて、頭が分かってても心が分かってくれない。

また、白が訪れた。

……目を開けると天井があった。
背中にはシーツの感触がある。
どうやら病院に運ばれたようだった。

隣にいたユキの母親から告げられた事実と共に、記憶が蘇る。
アタシは部屋にいた人達に、席を外して貰った。

一人でいたかった。
一人で、泣きたかった。
でも、涙が出なかった。
ただ、窓の外の雪景色を見つめていた。

翌朝私は退院して、そのまま港へ向かった。
一刻も早く、キツサキに帰りたかった。
ここに居たくなかった。
誰にも逢いたくなかった。

船の窓から、空を見ていた。
灰色の空から、光が少しだけ漏れていた。
5年前、ユキと手を繋いで歩いていたときの空と同じだった。
左手がぎゅっと握られた気がした。でもそれがすぐに気のせいだと
分かった。
アタシの手を握ってくれた親友はもういないんだと、改めて感じら
れた。

頬を何かが伝う感触。その感触だけが、空っぽのアタシを埋めてい
った。

「スズナさん最近元気ないです。何かあったんですか？」

「……ううん、大丈夫」

「スズナさんは笑顔の方が可愛いです。だから笑って下さい！」

ジムのトレーナーから自分に投げ掛けられた言葉。それはアタシが落ち込んでいた時に、ユキに言われたものと同じだった。

そのユキは、もういない。

でもアタシを支えてくれる人はたくさんいるんだ。

だからアタシは、また笑える。

ユキに見せてきた笑顔、まだアタシにはある。

「アハハ、ありがとう。」

クールに振る舞わなくていい。

笑顔で生きよう。

ダイヤモンドダストに負けない輝きで、笑顔で生きよう。

決意の空は、別れた日の空と同じ色だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0811ba/>

ユキスズ ~ Snowbell ~

2012年1月1日22時47分発行